

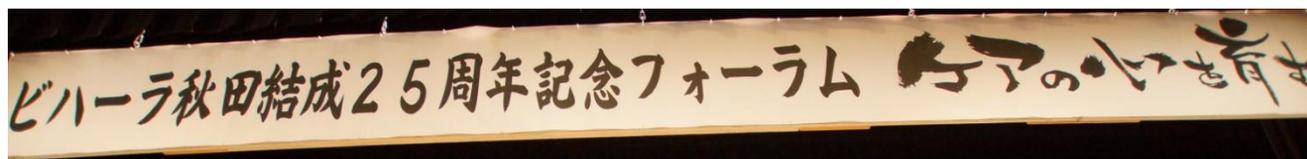
ビハーラレポート

No.76

平成30年2月15日 発行

結成 25 周年記念号

ビハーラ秋田 ホームページ <http://vihara.main.jp>
フェイスブック <https://www.facebook.com/vihara.akita>



「記念フォーラムにて」北秋田市文化会館大ホール

CONTENTS

- 代表あいさつ2
- ビハーラ秋田結成 25 周年記念フォーラム3
- ビハーラ Café ～がん患者と家族のサロン～11
- 新コーナー「みなサンガ」13
- インフォメーション15
- 各地区事務局16

結成25周年記念フォーラムを終えて

ビハーラ秋田 代表 新川泰道

謹んで新年のごあいさつを申し上げます。会員の皆様におかれましては、穏やかな新年をお迎えることと存じます。

去る11月19日に開催された当会結成25周年記念フォーラム「ケアの心を育む」に際して、当日は雪という悪天候にも関わらず多くの方々にお越しいただき、また関係各位の皆様より多くのご支援ご協力をいただき、無事円成できましたことに厚く御礼申し上げます。

「今、ここに生きる仏教 生老病死とケアの力～」と題しての上田紀行先生の基調講演では、現代の若者達の中にある精神的危機と、苦悩の最中にある人へ救いや癒やしを与える可能性がまだまだ仏教にあることなど、スリランカでのフィールドワークの経験を踏まえた貴重なご教授をいただきました。引き続き、久間泰弘師・佐藤俊晃師・上田先生、またコーディネーターの袴田前代表により「仏教の可能性」と題して行われたディスカッションでは、貴重な示唆に富んだご提言を各氏よりいただきました。非常に内容の濃い、意義深いフォーラムとしていただいた講師・パネリスト・コーディネーターの皆様方や当日の各お役目を果たしていただいた全ての方々に、あらためて御礼申し上げます。

当日のあいさつでも申し上げましたが、当会結成以来、会員の皆様や多くの方々よりお力添えをいただき、諸先生方から多くのご教示を賜りながら今日まで活動を続けてこられたことに、いま一度深く感謝申し上げます。しかしながら25年という年月を重ねてはきたものの、当会結成以来抱えてきた理想や希望にはほど遠く、まだまだ私共の力不足は否めません。それでも、上田先生の「ここと体が病み、苦しんでいる時にみんなが救ってくれるという姿を若い人達に見せていかなければならない」というお言葉を糧に、今後も微力ながらこの地域に於いてビハーラの語源でもある「息抜き・安らぎ」を与えられる存在となるよう、精進して参る所存です。

26年目となる本年の活動でも、ささやかながら着実な一步を踏み出せるように、忌憚のないご意見ご要望をお寄せいただければ幸甚でございます。

今後とも皆様のご指導ご支援を何卒よろしくお願い申し上げますと共に、フォーラム円成の御礼とさせていただきます。誠にありがとうございました。

合掌

ビハーラ秋田結成 25 周年記念フォーラム

「ケアの心を育む」

平成 29 年 11 月 19 日、ビハーラ秋田 25 周年記念の催しが北秋田市文化会館大ホールで行われ、約 250 人のご来場をいただきました。

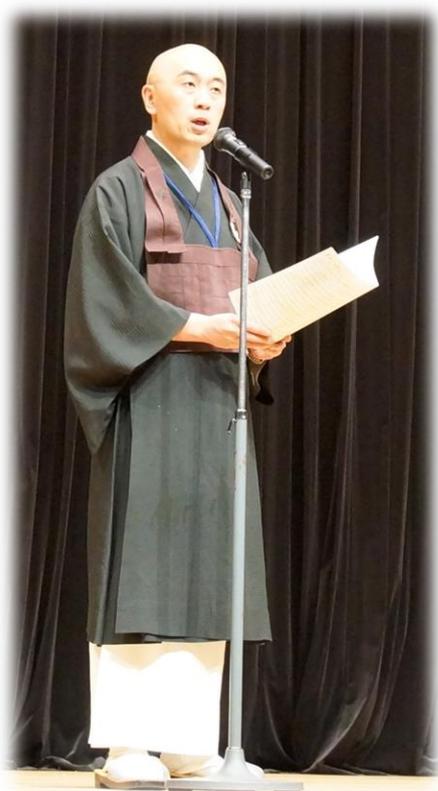
はじめに、既にご逝去なされた当会の会員さんや当会を支えていただいた方々、また支援活動に関わった阪神淡路大震災、東日本大震災、ネパール地震、熊本地震などでお亡くなりになられた方々に哀悼の意をささげ開会となりました。

ビハーラ秋田代表からは、当会の活動目的から現実的ないのちの問題との関わりを医療・福祉・宗教の枠を越えて行ってきたこと、25年間培ってきたものを今後の取り組みの糧にすべく、これからもこの地においてビハーラの語源でもある安らぎを与える存在となれるよう精進していきたいという挨拶がありました。

その後、今までの活動内容を映像で紹介されました。また、当会会員の小坂和子さんより、丁寧で凛とした語りと元気で会場を明るく和ませつつ、フォーラム全体の進行をしっかりと務めていただきました。

代表挨拶:新川 泰道 (藤里町 宝昌寺住職)

司会:小坂 和子さん (当会会員)



基調講演

「今、ここに生きる仏教

～生老病死とケアの力～

平成20年8月の能代でのビハーラ公開講座「チベット そして日本 ～今こそ『がんばれ仏教』～」から、9年ぶりとなる上田先生の講演となりました。

今回は、日本の若者に対する教育者としての取り組みである「リベラルアーツ（人間性の志を育む教養）」に触れつつ、生老病死の苦悩に向き合う姿勢やケアの心についてお話し下さいました。



上田紀行氏プロフィール：1958年東京生まれ。

東京工業大学教授、リベラルアーツ研究教育院長（2016年4月より現職）。

日本仏教の再生に向けての運動に取り組み、2003年より「仏教ルネッサンス塾」塾長をつとめ、宗派を超えた若手僧侶のディスカッションの場でもある「ポーズ・ビー・アンビシャス」のアドバイザーでもある。2004年に出版された『がんばれ仏教！』（NHKブックス）では、時代の苦悩に向かい合う寺や僧侶たちを紹介。日本仏教の未来図を提示し、大きな反響を呼んだ。

著書には、『生きる意味』（岩波新書 2005年）、『目覚めよ仏教！ドラマとの対話』（NHK出版 2007年）、『慈悲の怒り—震災後を生きる心のマネジメント』（朝日新聞出版 2011年）、『人間らしさ—文明 宗教 科学から考える』（角川新書 2015年）などがある。

この度は結成25周年おめでとうございます。これまでの皆さんの活動に敬意を表します。

このような大事な節目のフォーラムにお招きいただきまして、たいへん光栄に思います。

「私は価値のある人間だと思うか

～高校生アンケートから

近年は「第三の敗戦」に直面していると感じます。第一は太平洋戦争での敗戦、第二はバブル経済の崩壊、それに続く安心と信頼、支えの喪失は、まさに“敗戦”といえます。

非正規雇用が蔓延し、時の総理までもが当選したての議員達に向けて「議員だって“使い捨て”になり得る」と語った時は、大きな憤りを感じました。

「自分には価値がある」と思う若者は、韓国が75%、中国が88%、アメリカが90%、日本が35%でありました。日本の若者の46%が、「自分には価値がない」と回答（あまりない16%、全然ない30%）したことに大変な危機を感じます。

自分に価値がないと思っていても生きられる社会は、ある意味で優しい社会と言えるが、それでいいのでしょうか？

景気がいい時は、なんとかやっていけるかもしれません。しかし、不況が襲いかかり社会的な支えがどんどん失われていく時、このようなメンタルではものすごく弱く、安心や信頼の喪失の中で人を“使い捨て”のように感じ、他人の苦しみに無関心となります。まさに「こころの敗戦」以外のなにものでもなく、現代では苦しみに瀕するレベルが見過ごせない状況になっています。

「使い捨て・自己責任・誰も助けてくれない社会」という、とてつもない不安感に今の日本は覆われています。

ただ、東日本大震災を機に若者は反応し、人の苦しみを目の当たりにすることを通して、人間の精神性の深い問いを目覚めさせているのではないかと思います。

「苦しみを目の当たりにするということ」に私達の社会は、今まで多くを割いてきませんでした。皆が豊かになり、苦しみにも直面せず、皆が幸せになるようにやってきたのです。

しかし、何が正しく、何が間違っているのか、どう生きるのか、それを問いかけてくるのは「痛み」であったのです。

「スリランカの悪魔払い」

スリランカでは、人は孤独に陥りやすく孤独な人に“悪魔の眼差し”（病む症状）がつくとされ、その病む症状に対して皆で癒しの儀式を行います。人は誰でも病む時があり、それを周りのみんなが見ていて助けてくれるから「癒し」が起こるのです。

誰かが誰かを救う、誰かが苦しんでいてみんなが一生懸命助けているという姿は、そこに関わる全員が救われているのです。

「自分も苦しむ場面があったとき、こんなふうに周りの人が助けてくれるんだなあ」「私も老いて介護が必要になっても、あんなふうに皆があたたかい心で、救ってくれるんだな」というつながりを通して、実はその社会の全員が救われているのです。

だから、人が救われている（ケアされている）姿をどんどん若い人にも見せなければなりません。こんなふうに苦しんでいる人がいるけど、「大丈夫です」と言ってあげ

る。それを見てきた若者は、「人間は使い捨て」なんて言うと思いますか？

「お釈迦様と子どもを亡くした母親

（キサーゴータミー）のエピソード」

亡くなったばかりの赤子を抱え、悲嘆で錯乱状態の母親がお釈迦様のもとに来ました。母親は「なんとかこの子を生き返らせてください」と言うと、お釈迦様は「ケシの実を3つ、死人が出たことがない家から持ってきたら生き返らせてあげよう」と言ったというお話です。

なぜお釈迦様は、ケシの実を探すように村の家々を回るよう伝えたのでしょうか？「死人が出たことのない家なんてない」という無常を感じさせる一方で、その母親が村人の慈悲に触れる機会を与えようとしたことでもありました。

お釈迦様は法を説く以上に、我々の中にある慈悲が引き出され、お互いが支え合い、ケアしケアされていくことの中にこそ仏教の教えがあることを諭しているように思います。

「四苦八苦（一切皆苦）」

思い通りにならないことを引き受けて生きる。まさにそのことが、人間の精神の豊かさ、生き方を目覚めさせます。そこでケア、仏教でいう慈悲が必要とされてきます。

これからの仏教は「説く仏教」ではなく、人の苦しみを「聴く仏教」です。苦悩（人間の生老病死）をきっかけに、ご縁を作っていく。私達は「ご縁」という“過去のご縁”を強調しがちですが、苦悩があるからこそ“未来のご縁”を作りだしていく存在です。

良縁・悪縁と考えるのではなく、一見ひどい縁も自分の縁なんだと思えることが、人間の中の成熟なのだと思います。そのことのありがたさと、過去のご縁に感謝しながら、苦悩に向かい合う度に仲間が増えていくのです。

どんな時でも、私達は善き種をまいていくことはできます。自分の生きている間にその種が芽を出さないかもしれません。しかし、それがいつかどこかで芽を出し花を咲かせるのではないかというところに、私達は100%死ななければならぬけれど、その死というものを展望に変えていくことができます。そして、苦しんでいる者を救うんだという大きな手が必ずあります。

それが人と人との結びつきであり、苦悩をご縁に変えていくその向こうに、お釈迦様の慈悲があります。仏教的な「ケアの力」とはそういうものではないかと思います。



講演終了後には上田先生のサイン会が行われ、著書を購入した来場者は列を作ってサインをもらっていました。

ディスカッション 「仏教の可能性」

パネリスト：久間 泰弘 師 福島県龍徳寺住職、チャイルドラインふくしま事務局長、
曹洞宗復興支援室分室主事

佐藤 俊晃 師 北秋田市龍泉寺住職、曹洞宗総合研究センター委託研究員
上田 紀行 氏 基調講演講師

コーディネーター：袴田 俊英 当会前代表（藤里町 月宗寺住職）



袴田俊英 当会前代表

経済的発展と豊かな生活を手に入れた私達は、同時に忙しい時代の中で、精神的な病いが起こるといったような現実と日々接しています。

そのような中で仏教が注目され、マインドフルネスが流行とされたりしています。今、あらためて「仏教の可能性」を考えてみたいと思います。



久間 泰弘 師

「被災者の心のケア・・・宗教者・僧侶の視点から」

震災・原発事故から6年8カ月経ち、福島県の震災関連死は2,200人、被災3県で断トツに多い状況です。自死は3県合わせて200人弱、また虐待や離婚が増加し、子ども達の置かれる状況も変わってきています。ようやく避難解除が始まりました。しかし、40%の地域でこれから除染が始まるという状況です。この先何年かかるか…、そんな場所で行政・社協、地域団体と協力してニーズ把握、泥かき、除染活動、行茶活動を進めてきました。

SVA(シャンティ国際ボランティア会)の創設者である有馬実成(ありま・じつじょう)師の言葉に、「ボランティアは触媒」とあります。触媒自体はいくら時間が経ってもどこに行っても変わりませんが、触媒があることによって周りの物質や人々が、よい方向に変えられていく。ボランティアとはそのような黒子であるという意味です。私は支援者でもあり被災者でもあります。この言葉を大事に活動しています。

行茶活動は、今自分たちがどこにいるのかということ、仲間と共に一人一人のいのちを確認していく静かで大切な時間であり、お互いが命を確かめ合うあたたかいものです。

僧侶として、世の中の苦悩に対して向き合おうと思ってきましたが、自分自身も、津波の夢で眠れなくなりました。私の中にも津波が起こったのです。セルフケアということも分かっているつもりでしたが、現実を消化しきれず睡眠障害に陥りました。そうした時、限界があるんだということをも自分の中であきらめました。自分のできる範囲で最善を尽くすことにシフトチェンジし、支援活動で週一日休むようにしました。

ある時、沿岸部復興支援の仕事の大変さから志半ばでその職を退職し、被災地を置き去りにしたことの心の重みから、「私はダメな人間なんです」と号泣する女性と出会い、「今はお休みをいただく時かもしれませんね…」とお話したことがありました。先日、その女性からお手紙がきました。「自分を許していいんですね」と書かれてあり、私の中にあっただ彼女への心配もスーッと消えていきました。

「支援される・支援する」という相対的なところを生きていくだけでは、続けていけないということです。良い縁・つらい縁、お互いが認め合いながら、しかしそこにしっかりと生きていくことが、お互いのケアに繋がるのではないかと思います。

当初は、「何とかしなければ・何とかしてあげなければ」と思っていたところもありました。しかし、慈悲というのは一方的なものではなくて、お互いの力・想いが繋がったときにはじめて具現化されるのではと、今は思っています。



佐藤 俊晃 師

「<死・死者・死後>へ向き合う宗教としての仏教」

生・老・病・死。人間の代表的な苦しみと言われますが、この四つを経験することが、かけがえのない学びの機会になっている、ということもまた私達はよく知っています。

人に対する優しさやいたわりの気持ちは、ごくありふれた生活の中でも生まれるものです。そしてそれは誰の心にも芽生えるものでしょう。しかし深刻な苦しみや悲しみを経た後に形成される寛容性というのは、そんな日常的な場面から生まれたものよりも深いものだということを私達はよく知っています。そのことに思い至ると、四苦とは、嫌悪すべきものというよりも、人生における大切な契機とすることができるでしょう。

実は仏教にはそうしたことを教えてくれる言葉がいくつもあります。

たとえば『法華経』に「常懐悲感 心遂醒悟」（常に悲しみを抱いていれば、心はついに醒悟す）。という言葉があります。

『法華経』の中では、父親の訃報に驚いたその子供達が、死別の悲しみに耐えながらほんとうに大切なことに気づいていくというテーマがモチーフになっています。死別は永遠の別れ、そう聞くとそこですべてが終わってしまうような印象を受けますが、実際はその死別の悲しみを乗り越えることによってこの世に残った人の次の生が始まります。「常懐悲感 心遂醒悟」とはその始まりの一步を踏み出す大きな力を与えてくれる言葉だと思うのです。他者に対する思いやりとその行動としての「ケア」の心も、そうした経験によって裏打ちされてくるのではないのでしょうか。

また三時業という考え方があります。三種の時間に関わる影響とも言えるものです。

一、春に蒔いた種を秋に収穫する（順現報受）。二、今年蒔いた種を来年収穫する。今蒔いた種がいつか遠い未来に実がなる（順後次受）。この三種です。これを現在から未来へではなく、過去から現在へと言う視点で考えると、今の私は、近頃自分がなしたことの影響（順現報受）、かつて自分あるいは誰かがなしたことの影響（順後次受）、遠い昔、誰かがなした影響（順後次受）を受けている。そう考えられます。これは自分のなしたことが無限の時間をたどって将来へ影響を及ぼすことであり、同時に今の自分は無限の時間を遡って過去と結びついていることを意味しています。これをよく考えることによって「孤立」「孤独」という寂しさから救われる糸口になると思うのです。

こうして見ると仏教というのは、悲しみや苦しみに耐えてきた人間が、長い歴史の中でその「苦」を乗り越えるすべを蓄積してきたのだと、あらためて気づかされます。そんな



教えに、四苦のうちでも最も痛切な苦しみである死別の場、葬儀の場において出逢うことができる、むしろそういう場にするからこそ私達僧侶に求められているように思います。

生きていれば必ず訪れる四苦。しかしそれを乗り越えることによって養われていく、ほんとうの優しさ、いたわり、思いやり。そうした〈他者への寛容性＝ケアの心〉とは、人生の力と言ってよいものだと思います。それを育むことこそ仏教の役割だと信じています。

上田 紀行 氏

お二人のご発言を受けて…。

先ほどダライ・ラマとの対話の中で、慈悲はまず自分自身に与えられるものなのではないか、という話をしました。

自分自身のとても苦しいところ、情けないところを認めて、それが他の人への慈しみにもつながっていくというものです。これは「自分には価値がない」こととは違います。

赤子の時、何もしなくてもそこにいるだけでどれほど周りの誰かを喜ばせてきたか、まず自分の価値を認めなければなりません。「自分には価値がないから何もできない」と思う時もありますが、何かをやった後に自分にも価値があったんだと気付くこともあります。自分には価値がないという気持ちが、一瞬前の行動で次の自分を変えていくのです。

滅びていくのも諸行無常であるなら、よい変化も諸行無常。自分は価値がある人間だと認めて、価値のある世界に少しずつ変えていくのも諸行無常です。苦悩に向き合いながら、よい循環を生み出していくのがご縁です。仏教は解説のためにあるものではありません。

今この現場に、尊いものが見えてくる、ほとけ様の慈悲が現れるのです。

最後に当会の中嶋美枝子 副代表より、会場にお越しいただいた皆様への感謝の言葉とともに閉会となりました。



聖なる
ご縁に感謝!

ビハーラ Café ～がん患者と家族のサロン～

「いのちの見方」-ビハーラ活動の目指すもの-



平成 29 年 11 月 1 日（水）、まちなかトープ（北秋田市）を会場に、袴田俊英・当会前代表（藤里町 月宗寺住職）よりお話を伺いました。

「日本経済が目覚ましく発展した昭和 30 年代の中ごろから、国民所得倍増計画などの近代化が進む一方で、農村からはかやぶき屋根が、『結（ゆい）』と呼ばれた協同作業がなくなり、農業機械のために多額の借金を抱え出稼ぎの増加など、農村から都市への人口流出が進んでいきます。その結果として、安心して暮らせる共同体としての村の機能が、『会社』にその役割を取って替われ、現在はその会社という環境さえ終身

雇用も危うくなり競争の場となって、ますます人間の孤立化が進んできました。

またバブル経済が起こる少し前頃から、最新医療技術の導入により、人間の生命さえ思い通りにデザインするようになるなど、近代的な環境が整う一方で人間としての準備がおろそかなまま現在に至ります。」

「そして『お葬式』、人生の締めくくりとあの世への旅立ちに関わるという地域共同体にとって大事な役割でさえも、その地域社会が衰退し家族関係も希薄化したことで業者任せの、お金にまつわる条件が優先される時代となり、その方が現代的・効率的でよかれと思ってきたことが、かえって人々を不安にさせ更に孤独感を深めることになったのではないのでしょうか。」

人間の魂までもが孤立するようになってしまった結果、秋田県内の自殺率が昭和 40 年代から増加していく傾向と社会情勢とを重ね合わせた上で、それに対する宗教のありようなど、そこからビハーラ活動の目指すところについて語っていただきました。

後半はコーヒーやお茶などを飲みながら、お話の感想や日頃の思うことなどを語り合い、最近ご無沙汰だった古くからの会員さんも見えられ、懐かしい話題が飛び交いつつ和やかに過ごしました。



がんになって-すべての出会いに感謝-



平成 29 年 12 月 16 日（土）、ビハーラ café が北秋田市まちなかトープで行われました。始めに、吉田みどりさん（北秋田虹の会代表）からお話を伺いました。

5 年前にがんが発覚、9 時間にも及ぶ大手術と抗がん剤治療を経て、失意の日々を過ごしていましたが、経過は良好に。

再発の不安は常につきまっていたそうですが、ご家族や職場の方々などの理解で徐々に前向きな生活を送れるようになったといいます。やがて、大館で行われているがんサロンの存在を知り、地元北秋田でも同様の会があったら…と思っていた頃に、当会のビハーラ Café に参加されたのが一昨年の春。

その頃、同じがん経験者 4 人でスタートして「北秋田虹の会」を設立し、毎月の例会では、和やかに時にはシリアスな話題と有意義な情報交換の場を設けているとのことでした。

そして、後半の部では、コーヒーやお茶をいただきながら、吉田さんのお話を受けての参加者同士の意見交換や語らいの場となり、あたたかい雰囲気の中で午後のひとときを過ごしました。



新コーナー みなサंगा

近年は“お寺”を場としたさまざまな講座や体験教室、落語やコンサートなどが行われています。当会会員のお寺で行われている各種催しについてご紹介するコーナーを、新たに設けさせていただきます。

第1回 てら YOGA(大館市本宮寺)

～2月2・9・16・23日、3月2日 開催～

・“てらヨガ”に至るまでの経緯は？

私がヨガに至るまでですと、お寺での坐禅会が縁でした。その日参加の方への一通りの説明と慣らしをして、いざ坐禅。初めてとのことだったので、坐相を拝見したのですが、これが実にきれいでした。私も一緒に坐り、その後のお話で「何かやっているのですか？」とお聞きしたら「ヨガをしています」とのことでした。色々お話をしたのですが、その日のお話で一番印象的だったのが「坐禅は目を開けてるんですね、つい目を閉じちゃいます」という一言でした。

”坐禅は瞑想じゃない”というのは曹洞宗でも伝統的に言われていることのように思います。私自身「そういうものだ」という理解に留まっていたし、そのように口にしたこともあったことに気づきました。



た。さて、では実際にどう違うのか？明らかにしないままだとこれから先うかつに口を開けないなと感じたので、瞑想やヨガも機会があったらやってみたいと思ったのがこの出来事でした。

・その機会があったのですか？

実は思い起こすと、その坐禅会より以前に「ニューイヤーヨガ」という広告を新聞紙上で見つけていたのです。ヨガとって日頃目にするのは”健康ヨガ”や”笑いヨガ”といった講座などを見聞きする程度で、それ自体も興味はあったのですが、その中で先の広告は心に残ってたのでしょね。「あれ？そういえば…」と思い出しました。正月三が日の開催であったため諦めていた事とともに記憶が蘇ったので、正月の新聞を引っ張り出し、連絡先を確認して定期開催しているヨ



ガのクラスに参加したのが、かれこれ2年ちょっと前ですね。

・今回お招きする講師がその先生なのですね？

そうです、103YOGA 道場のナナディアン先生です。インドで伝統的なYOGA 修行をされて、インド政府公認の資格をもっておられます。お寺へ先生をお招きするのは実は2回目、昨年12月に観音講というお寺の集まりにてヨガを行いました。椅子の方や、足腰に難のある方も…と相談したところ、私達に合わせたプログラムを組んでいただき、最初は敬遠していた方も含めみんなで取り組みました。紹介した写真はその時のものです。詳しくはこちら (<http://oodate.net/syousai.php?no=663>) などをご覧ください。

・“てらヨガ” は継続的に行うのですか？

今回の企画は檀家さんに限定せず、その上で単発での開催ではなくある程度の継続性を持ちたいというこちらの要望と先生と私の予定なども検討して、まずは冬の農閑期に6回の”てらヨガ”を開催する運びになり、1月26日から毎週金曜日の15時からとしました。

内容は呼吸法やストレッチを中心としたスローヨガ。初心者向けですのでどなたでも参加いただけます。予定の半分3回を行いましたが大館市内や北秋田市からも参加をいただき、時には笑い声も聞こえながらのいい雰囲気となっております。各回ごとに参加を募っておりますが、定員もございますので、その点ご了承ください。

開催曜日については平日開催でなければ…という声も聞こえてきたので、今後要検討ではありますが、夏や秋には”キャンドルナイトヨガ”などという企画もやってみたいですね。

坐禅会・写経会・梅花講（お寺の御詠歌講）からの”てらヨガ”参加や、その逆に”てらヨガ”からの各会への参加など、いい繋がりも生まれています。

1/26 (金) 15~16:00
2/2・9・16・23
3/2

てらYOGA

in 本宮寺

呼吸法 初心者 スローヨガ

お寺メンバー¥700 103メンバー¥1000 一般¥1100

●お申込み・お問合せ●

① Meetup から <https://www.meetup.com/ja-JP/103-YOGA-DohJoh/events/246744648/>
② ✉ english_doj_103@ybb.ne.jp
③ ☎ 0186 - 55 - 3719 (月・祝休)

インフォメーション

ビハーラセミナー

日時 平成30年2月24日(土) 午後3時～ 午後4時頃
会場 北秋田市民ふれあいプラザ コムコム
演題 「ボサツ行としてのビハーラ活動 ～これまでとこれから～」
講師 柴田寛彦氏(医師、能代市・本澄寺住職)
参加費 無料

結成25周年を経ての第一歩のセミナーとして、当会が結成されて最初のセミナーでご講義いただいた柴田寛彦先生をお招きします。

僧侶でもあり医師でもある先生には、度々ご教授をいただき、当会を支えて下さっておりますが、今一度ビハーラ活動の意義と近年の潮流についてお話をうかがいます。

※セミナーは会員以外の方も聴講可能です。その後の総会は会員のみとなります。

ビハーラ秋田 平成30年度総会

日時 平成30年2月24日(土) 午後4時30分～

セミナー終了後、同会場にて行います。

会員の皆様はふるってご参加ください。

ブックレビュー

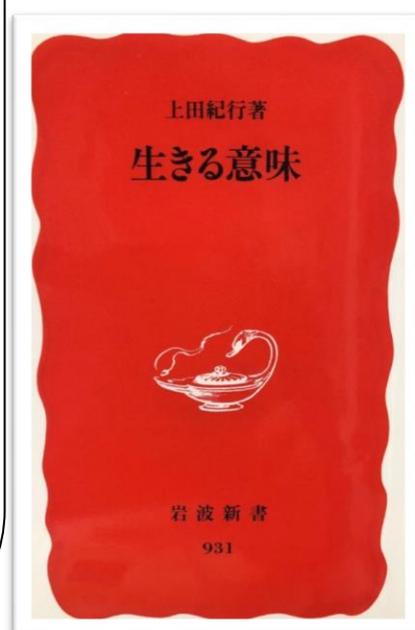
『生きる意味』 上田紀行 著

この度のフォーラムでお越しいただいた上田先生の代表的な著作です。

自分が何を欲しているかより、他人が何を欲しがっているのかに合わせる生き方の中で、私達は何を失ってきたのか。自分の色もにおいも消して生きること、自分自身を透明化し、自分で自分の存在さへ感じられなくなっている…。そんな人間の尊厳が最大に傷ついた状態のときに、必要なこととは何なのか。

フォーラムに参加できなかった方々にも、是非一度手にとっていただければ幸いです。

(岩波新書 定価 740円+税)



入会案内

随時入会できます。各事務局までご連絡ください。
ビハーラレポートや各種案内を送付させていただきます。

年会費 2,000 円

郵便振替 02580-5-50937

各地区事務局

能代地区	山田 俊哉	0185-58-2302 (倫勝寺)
藤里地区	新川 泰道	0185-79-1522 (宝昌寺)
二ツ井地区	木村 高寛	0185-73-2755 (梅林寺)
鷹巣地区	佐藤 俊晃	0186-66-2032 (龍泉寺)
大館地区	佐藤 善廣	0186-49-5173 (本宮寺)
森吉地区	奥山 亮修	0186-72-4143 (龍淵寺)
阿仁地区	今井 典夫	0186-82-2418 (善勝寺)
上小阿仁地区	保坂 康雄	0186-77-2750 (福昌寺)
合川地区	亀谷 隆道	0186-78-2344 (太平寺)

【編集後記】17年前に参加した「こころをよむ～やさしい仏教入門講座」がきっかけで、ビハーラ秋田に関わらせていただき、素晴らしい話を聴く機会やボランティア活動をする機会に恵まれ、またご縁を広げることができましたことをとても光榮に思っております。感謝 感謝。 富樫善明

事務局から

当会の活動にご理解ご協力ありがとうございます。今後も活動を継続していく為にも、会員皆様におかれましては、年会費の納入をよろしくお願いいたします。

住所変更などございましたら事務局までご連絡お願いいたします。皆様からのご意見・ご感想、情報・案内などお待ちしております。

ビハーラ秋田 事務局

〒018-5752 大館市本宮字熊の下 14 本宮寺内

電話 0186-49-5173 Eメール vihara@jt.main.jp